

審査の結果の要旨

氏名 尾崎 信

2011年3月11日東日本沿岸部を襲った津波は深刻な被害をもたらした。本来、集落は自然災害からの安全性と生業の利便性というふたつの矛盾する要求の相克によりその立地を求めるものであるが、三陸地方沿岸では、津波災害から時が経つにつれ、利便性・経済性が安全の論理に優先されてきた場面が少なからず確認される。本論文は、三陸地方の沿岸集落において安全の論理が優先してきたと考えられるものとして神社に着目し、神社の立地が自然環境との関係性、および集落との関係性によって定まるものと仮定し、その立地メカニズムを論考している。神社立地に関する既往研究では、国内における神社立地には地域差があり、その差は周辺の自然環境に由来するものであるという点に集約される。そしてこの意味では本研究は同じ地平に立つものである。しかし、既往の知見の限界であった対象地域の狭域性、対象神社選定の恣意性を本研究ではクリアしている。また、本研究では神社の立地を集落との空間的な関係から見ている点にオリジナリティがある。第1章では、上記の内容を論文の背景として述べ、対象地として岩手県久慈市から宮城県石巻市（万石浦）に至る沿岸部を選定している。

第2章では三陸地方沿岸の神社について対象を定義し、現地調査および文献調査を行った上で、神社の物理的な位置関係、神社の属性（旧社格、規模、主祭神、祭祀）の2つの観点から神社の立地特性を分析し、対象地では、神社の規模や祭神に応じて、地域を取り囲む自然環境から適切な地形を選定し立地させており、なかでも、尾根の先端や脇の斜面が選ばれる傾向が強く、同数存在するはずの谷地形にはほとんど立地していないことを指摘している。また、これを歴史的な経緯と照合することで、この地における神社立地メカニズムの転換点が12世紀中期にあったことを論じている。12世紀中期以前に創祀され現在まで続く神社は限られた例外を除いて尾根立地が徹底されている反面、12世紀中期以後に創始された神社は、個人祈願や現世利益への願いを込めた勧請の文化が広まるとともに多様な立地、すなわち低平地や海岸への神社立地や遷座が確認されるようになったことを神社史料・郷土史料を読み解くことにより示している。また、遷座の記録を有する神社を悉皆調査し、遷座は集落へ近づく方向へ移動することが一般的で、集落から離れる方向へ遷座をする場合はその移動距離が短くなる傾向を示し、基本的には神社を集落に近づけたいという動機があり、集落から遠ざけざるを得ない場合もその距離がなるべく小さくて済むようにしていることを示している。神社の立地メカニズムを、現地調査・史料調査を通して通時的・悉皆的に論じており、高く評価できる。

第3章では、現地調査を通じて把握した今次津波による神社被災状況についてデータを整理し、神社の被災傾向を把握している。三陸地方沿岸の神社は、今次津波ほどの巨大津波によっても14%程度しか被災を受けず、浸水域内にあっても社殿の被害を免れたものが同程度存在するという、津波からの安全性が高い立地であることを指摘し、また、既往津波による経験が立地選定に与える影響が大きかったことも確認している。第2章で得られた知見を踏まえて、過去の津波経験が神社の立地に与える影響を丁寧に追跡・論証しており、類例を見ない成果であると言える。

第4章では、対象神社が立地する集落と神社の空間的な関係性について分析を試みている。はじめに集落をマクロスケール・メゾスケールの地形的特徴で分類し、地形的特徴が共通する集落について、神社の空間構造を比較的論じている。結果として、神社立地はその多くが集落近傍の高台もしくは微高地が選ばれ、斜面の傾斜に応じた参道が取り付けられている場合が一般的であるとしている。評価すべきは、このような一般則から外れるパターンについてケーススタディを行っている点であり、海との距離の違いに応じて空間構造の違いが生じたケースや、社会的な理由により神社立地に制約を受けたと考えられるケース、集落内で神社のネットワークが形成されているケース、自然環境や集落との関係よりも機能が求められるケースなどについて論じており、社会の特殊な条件が神社立地に与える影響を丁寧に示している点が評価できる。

第5章では、以上をとりまとめ、今次津波によって多くの神社が被害を免れたのは、単一のメカニズムによるものではなく、古代より続く「原型」、12世紀中期からはじまった「展開型」、津波災害などを経た「経験型」という3つのメカニズムによるものであると結論づけている。

以上概観したように、本研究のもっとも評価すべき点は、神社という集落にとって重要な拠点であるものの、その立地メカニズムなどの実態がほとんど明らかにされていない対象について、自然環境との関係性および人間環境（集落）との関係性というふたつの視点から客観的データに基づいた知見を得たことにある。このような神社立地と災害に関する本研究のアプローチは、自然環境との関係性のみに着目してきた既往の知見とは異なり、独自性の高い方法論および成果であると結論づけることができる。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。